

世界の中の日本文化と日本文学

ドナルド・キーン
(コロンビア大学名誉教授)

世界の中の日本文化と日本文学



講演中のドナルド・キーン名誉教授

どうも有難うございます。私は、現代の日本の文化が、どのように世界に見られているか、について語りたと思います。

七十四年前のことです。私は、コロンビア大学の学生で三年生でした。当時の私は、比較文学の専攻でしたから、あらゆる文学を読んで、特徴や似

ドナルド・キーン

ているところを分析しようと思っていました。私の常識では、文学が始まったのは古代ギリシヤで、その後はローマ文学、その後にはヨーロッパ諸国に色々な文学が出来たということでした。最後にヨーロッパ人が大西洋を渡り、アメリカに文学を創りました。それは私だけの常識ではなく、全てのアメリカ人学生がそう思っていました。ちよつと違うのは、私はその前に中国人の友達が出来たことです。中国人、東洋人と親しくなったのは生まれて初めてでしたが、とてもいい友達でした。ある日、「中国に文学がありますか」と訊くと、彼は「あるとも」と言いましたので、何がいかと訊くと、「是非、論語を学んでください」と言いました。それで論語の英訳を読んでみると、これほど退屈なものはないと思いました。常識的なことばかりで、哲学ではないからです。哲学はやはりプラトンやアリストテレスから始まったもので、これは哲学の名前に値するものではないと思えました。それで中国文学に関心を抱けませんでした。

しかし、まだ少し興味があつたので、今度は漢字を教えてくれと頼みました。彼も喜んで教えてくれましたが、中国の南の人で北京の標準語を知りませんでした。というところで、私に漢字の意味を英語で説明しても、音が全くありませんでした。なので会話は全く不可能で、その

程度の知識にとどまり、東洋に文学があるかどうかまで考えませんでした。文化となると、当時、日本の文化として知られていたのは浮世絵です。他に、非常に多くのアメリカ人の子どもが、日本製のおもちゃを持っていましたが、日本の製品は、安くてすぐにダメになるという悪い評判でした。

私が十八歳、一九四〇年のことです。ヨーロッパに激しい戦争が起きました。ナチスドイツがノルウェー、デンマーク、ベルギー、オランダ、フランスを占領し、秋からロンドンへの空爆が始まりました。反戦主義者の私が、一番悩んだのは、武器を使わないでどのようにナチスドイツを止められるかということでした。そして次はアメリカではないかと思われた、非常に暗い年でした。恐らく私の生涯で、一番暗い年だったでしょう。昨日ナチス軍がどこそこまで行ったとか、そういう報道ばかりで、新聞を読むのも嫌でした。

ニューヨークの真ん中に、タイムズスクエアという広場がありますが、そこに本屋があります。いつもその本屋の前を通ると、何か掘り出しものがないかと思っただけで見えていました。古本屋ではなく新本でしたが、売れ残った本を扱う店です。その中で箱に入った本があり、ちょっと面白いと思って見たら、私にも分かるような日本の風景が表紙にあったので、日本と関係の

札幌大学創立45周年記念講演会／札幌大学文化学部第4回北方文化フォーラム

「世界の中の日本文化と日本文学」

講師：ドナルド・キーン氏（米コロンビア大学名誉教授）



ドナルド・キーン名誉教授の講演を聴く聴衆

ある本と分かりました。その本の名前は、英訳でしたが「源氏物語」でした。私は良い教育を受けたつもりでした。しかし一度も、日本に源氏物語があるとは知りませんでした。私だけでなく、恐らく当時のアメリカの学生で、源氏物語の名前を知っている人は一握りに過ぎなかったと思います。それほど、日本の文学は知られていなかったし、無視されていました。

私はその源氏物語を買いました。理由は、単に値段が非常に安かったからです。そして家へ持ち帰って、読んで見るとそこに書かれた世界は、私の住んでいる世界と完全に違っていました。戦争は全くなく、もちろん人殺しも全くありませんでした。登場する人物は何のために生

きていたかという点、だいたいにおいて二つのこと、「愛」と「美」だけです。特に主人公の光源氏は、愛人が多くて極めて魅力的な男性でした。

西洋の伝統にもそういう人物がいることはいます。例えば、モーツアルトのオペラに「ドン・ジョバンニ」などです。恋人がたくさんできた男性の話で、ドン・ジョバンニという男は一つだけのことに興味がありました。女性をものにするからです。そして終わってから彼女は無用の存在になります。オペラの中でフランスに何人、イタリアに何人、イギリスに何人、しかしスペインには三人という言葉もあります。愛人を喜ばせたり、思い出すことは全くない。もう興味がないのです。そしてエルヴェーラという女性はそれを知らないで、もう一度逢いたいと言うのをドン・ジョバンニは、私たちの関係がもう終わったと知らないからだろうとばかりにするのです。そして一番の侮辱として、自分の召使を彼女のところに行かせます。

そういう主人公はありますが、光源氏は特別深い関係がなくても、忘れることがありません。当時の女性は簾などに囲まれていたので、顔を見ることも出来ず、裾の布の色などに魅力を感じました。そして素晴らしい手紙が来ると、光源氏は非常な関心を示します。しかし過ちもありました。末摘花という女性は、より悪者ですが、しかし源氏は、新しい宮殿に彼女のた

めの部屋を設けるのです。彼はドン・ジョバンニと全然違う人間です。そして女性もみんな違うのです。光源氏は、各女性が一番喜ぶやりかたで話し、一番喜ぶように愛情を示しました。ドン・ジョバンニは自分の目的があつて、なるべく早くその目的に達しようとした。まるで違います。

先ほど私は手紙のことを申しましたが、ヨーロッパの文学にも手紙が出てきます。私がいつも思い出すのはロシア文学ですが、プーシキンの詩「エウゲーニイ・オネーゲン」の中に、若い女性が自分より年上の男性と会ったとたんに愛し、自分の純粋な愛情を手紙に託して、相手に送ります。源氏物語では、まず女性はどんな紙がふさわしいか選び、次に墨の濃淡を考え、その上字を考えます。同じ発音に変体仮名がたくさんあるので、適当な変体仮名を選んで美しい手紙を書き、それを適当に折ることも大事でした。一旦できたら、季節の花をつけて、最終的にきれいな小姓（子供）に預けて愛した人に渡します。しかし「エウゲーニイ・オネーゲン」の場合は、どういう紙を使ったかは分からない。また、手紙を急いで書いたから、多分字も汚かったでしょう。大事なのは内容です。日本の手紙ならきれいな日本語、多分歌が一つ二つ入っていますが、ロシア人は「私はあなたを愛しています」で十分だと思ったのでしょう。全

然違う世界です。そしてロシア人は誰にその手紙を預けたかという、美しい小姓ではなく女中の息子でした。私は源氏物語を読んで、そこに非常に強く魅力を感じました。そこから私の日本に対する関心、愛情が燃えてきたのです。

翌年、日本でいうと昭和十六年ですが、日本人の家庭教師の下で、日本語の勉強を始めました。当時はいい教科書がなかったので、使ったのは日本の小学生たちが使うものでした。「サイタ サイタ サクラガサイタ」で始まる教科書でしたが、日本語への関心が高まりました。同じ年の十二月に、私が最も嫌なもの、戦争が始まりました。私は反戦主義者でしたから、どんな場面でも敵を殺すことはできないと思っていましたが、その時、アメリカの海軍に日本語学校があると聞きました。志願してワシントンに行き、試験を受けて入学できました。十一ヶ月の集中勉強で、私たち三十名の生徒が日本語を習いました。その十一ヶ月間、日曜日だけは休みでしたが、他は日本語ばかりやっていました。海軍のことは一切覚えなかった。初めて軍艦に乗ったとき、どっちが先か後ろか分からないほどでした。海軍のことは 何一つ覚えなかったけれど、海軍が私たちに日本語を教えたのは別の目的があったからです。

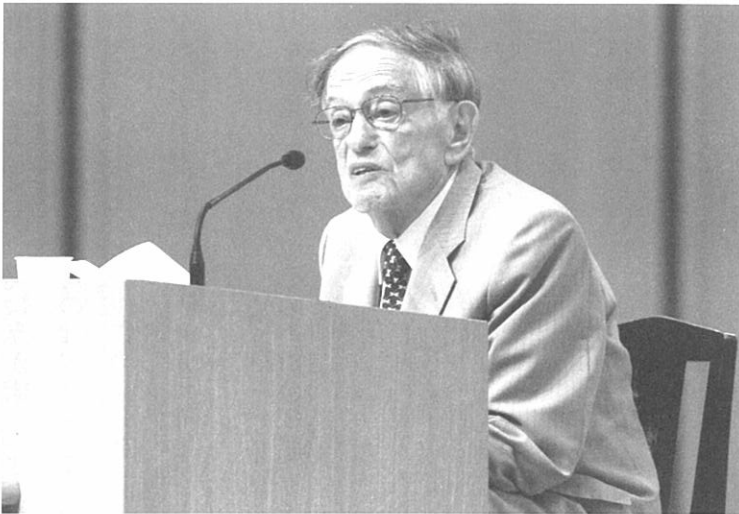
卒業してハワイに派遣され、そこで日本人が残した書類を翻訳していました。私には、自分

の翻訳によって、戦争が早く終わるだろうという希望がありました。実は私が訳した書類は全部無味乾燥そのもの、何の意味もないものばかりでした。一番嫌だったのは、日本の中隊や大隊の将校の名前でした。全部ローマ字にするのですが、人名事典もないので、「山田一郎」ならいいですが、難しい名前の場合は、勝手に名前を作って、だいたいヨシオかマサオにしました。

しかしある日、他の人が避けていた書類があることを発見しました。その理由は、悪い臭いが立っていたからです。私は勇気を奮い起こしてどんなものか見てみると、それは全部日記でした。日本人の兵隊の日記です。悪い臭いは、血の臭いでした。要するに、日本の軍人の死体から取った日記だったのです。日本の軍人は、みんな元旦に日記を貰い、日記をつけるように教えられました。アメリカの軍人には、どんなことがあっても日記をつけてはいけないと命令されていました。恐らく日本軍には、どうせ外国人は日本語が読めないと油断していたのでしよう。それだけでなく、日本では日記の伝統は非常に根強いものでした。平安朝から日記文学があります。世界の文学の中で、日本文学の特徴の一つは日記文学があることです。他の国では、例えば百科事典を引くと、誰それには有名な日記があるという程度ですが、日本の百科事

典には日記文学とはつきり書いてありますし、どんな時代でも日記がありました。日記がない時代はありません。そういうことがあって、日本の兵隊たちも書いていました。

私は日本語学校では楷書だけでなく、行書も覚えたので、日記を読めました。もちろん日記のイロが滲んでいることもあったし、鉛筆で書いた場合は字が非常に薄くなって読めないものもありましたが、それらの日記は私にとって日本人について一番の教育でした。そのときまでは、日本人は狂信的に戦い、平気で命を捨てる人々と思っていましたが、日記を読んで同じ人間であることを発見しました。最初は「軍気旺盛ナリ」など書いてありましたが、自分の乗っている船の隣の船



講演中の Donald・キーン名誉教授

が、アメリカの潜水艦にやられたときに日記に色々書いていました。そして、最後は南太平洋の島に到着します。島は大変きれいでしたが、食べ物は何もなく、水も足りない。マラリアがある。また、毎日アメリカの戦闘機が来るなど、地獄のようなところです。私は読みながら、敵であるとはいえ同情していました。特に、ある日記の最後に、英語で「この日記を拾うアメリカの兵隊、戦争が終わりましたら、私の家族にこの日記を返してください」と書いてあったものさえありました。私もそのつもりで取っておきましたが、事務所にいないときに誰かが私の机の中を探し、私が持つべきものではないと判断して没収されました。非常に残念でした。

戦争が終わったときに、多くの人は日本語は役に立たないだろうと思い、同僚はそれぞれの道に進みましたが、私は日本語を捨てないことにしました。就職できないかもしれないと恐れましたが、それが私の希望でした。コロンビア大学に戻り、素晴らしい先生に恵まれました。角田柳作先生です。日本ではあまり知られていませんが、すばらしい学者でした。明治時代の方で、子供の頃から日本の古典を読んでいた人です。平安朝から元禄時代の文学など、あらゆるものを全く自由に読めました。また、漢文もできて、漢詩もやる。そういう先生にめぐり合ったのです。先生の専門は日本思想史で、私と一緒に戦時中に日本語を覚えた若い人は、戦争

が終わり大学に戻り、日本文学を勉強したかったとはいえ、それぞれ違う時代に興味がありました。平安朝をやりたいという学生もいたし、元禄時代、中世文学、あるいは近代・現代をやりたい人もいました。そのすべてを先生が全部教えたのです。

今思い出すと、一年半で私たちが読んだ日本文学は大したものでした。平安朝の文学として、源氏物語の須磨と明石の巻を読み、清少納言の枕草子も読みました。また、中世文学として方丈記、お能の松風、卒都婆小町も読みました。元禄文学では好色五人女を全部読みました。西鶴の文学の場合、伏字がかなりありましたが、誰か親切な人が鉛筆で書き込んでくれたので、私たちもすらすらと読めました。奥の細道も読んだし、近松門左衛門の国性爺合戦も読みました。それらを一年半で読めたのは、非常な知識欲があったからです。四年間、自分のやりたい勉強ができなかったから、やつのことで勉強できた喜びはちょっと説明できないものです。私は教師になって、学生が欠席する場合はいつも怒りました。こんな良い機会はないだろう、文学を読む時間はないだろう、今読むべきだいつも思っていました。

またその時まで、西鶴の英訳はありませんでした。組の一人が、その翻訳を發表しました

し、私も、奥の細道の最初の完全な英訳を出しました。また、近松門左衛門の浄瑠璃十一を訳し、発表しました。その組の人たちの多くは日本文学を翻訳し、世界に広めたつもりです。自分で自分の業績を語るのは趣味が悪いと分かっています。が、当時は他の国にも翻訳はなかったので、まず日本語を勉強する条件として、英語で読むことが最低条件でした。翻訳は英語だけです。ドイツ語訳があっても、英語の重訳でした。現在でもだいたい英語の重訳です。私たちは可能な限り英訳をやりました。

もう、日本文学は世界の文学に加わりました。無視できません。以前は、例えば世界の詩歌という選集があれば、日本の俳句が一つか二つあれば



別室の中継モニターで講演を聴く聴衆

十分だと思われていました。日本文学には価値がないという考え方もありましたが、今なら万葉集も入るし、和歌の翻訳もあるし、もっと新しい詩歌も入ります。そうでなければ世界の文学、世界の詩歌と言えなくなる。西洋の詩歌という題がふさわしい。短篇小説の場合でも、日本の短篇があります。演劇の場合でも、同じことです。以前は、日本の演劇は海外と全く違って、一度だけ大正時代に当時のソ連まで行きましたが、それだけです。他の国では歌舞伎もおもも文学も、知られていなかった。そういう演劇があることが知られていなかった。今は、全く知らないという人はほとんどいません。みんな歌舞伎はこういう芝居だということは知っていて、謎ではなくなり、事情はずい分変わりました。

私が初めて教師になったのは、アメリカではなく英国のケンブリッジ大学で、それも非常に面白い体験でした。古風といえば古風で、ケンブリッジ大学はヨーロッパの古い大学の一つで、文学といえばやはり古代ギリシャ語とラテン語でした。日本語を教えるときでも、日本語を主語として教えていましたから、学生たちは知らないうちに古今集の序を知っていました。最初に読む日本語は、大和言葉で紀貫之が書いた日本語です。当時、英国に日本人はほとんどいなかったのです、私は日本語の会話を教えるように頼まれました。私の会話は現代語でした

が、学生たちは平安調の言葉で、それがチャンポンになりました。半分が平安調、半分が現代日本語なのです。始めのうちは、例えば女の子のことを「をみな」、男のことを「をのこ」という発音でしたが、私の影響でだんだん変わり、ケンブリッジ大学は現代の日本語になりました。

私が初めて勉強を始めた頃、ヨーロッパで日本語を教える大学は三つ四つしかありませんでした。アメリカでちよつと事情が違うのは、西海岸には日系人がいて、ハワイ大学、カリフォルニア大学、ワシントン大学で日本語を教えていたことです。東海岸の大学で日本語を教える大学は三つしかありませんでした。今は、日本語は外国語として三番目です。よく日本の新聞に、現在の外国人はみんな日本語に興味をなくして、中国語を勉強しているという記事が載っています。信用しないでください。この間、カリフォルニア大学の先生と話しましたが、博士号の学生で、中国文学の学生は日本語の半分です。ですから決して日本文学が忘れられているとは言えません。

そのように日本の文学は、たいへん変わりました。日本の文化はどうでしょう。私が日本に住んでいたころは、日本の料理屋は一軒しかありませんでした。そこにはお刺身がありません

でした。つまり、当時の外国人は生の魚を食べないので、すき焼きと天ぷらだけでした。現在、ニューヨークには日本料理屋が五百軒あります。日本人が足りないから、中国人が鉢巻をつけて、日本人の真似をしてお寿司を作っています。戦前、日本の製品は安くてすぐ駄目になると言われましたが、現在日本の製品は高くても値打ちがあるという評判です。完全に変わりました。日本軍は戦争に負けましたが、日本文化は勝ったのです。日本文化は世界的に知られるようになり、日本人の作ったもの、日本人の文学は世界的に高く評価されるようになりました。そういう大きな変化に参加できたことは、私の何よりの喜びです。有難うございました。

御手洗（司会）…先生、有難うございました。これから質問コーナーに入ります。最初の質問は、「日本文学の魅力とは」です。

キーン…日本文学の魅力はいろいろあります。例えば俳句の魅力を挙げましょう。現在、アメリカの小学校で子供達は、英語で俳句を創っています。どうしてかと言うと、子供にソネットのような詩を創ることは無理です。俳句の場合は自分の体験を書けばいい。見たもの、考えた

こと、それが俳句の特徴です。もう一つは、俳句の場合、完璧なものができます。十四行詩は非常に難しく、韻を踏むという面倒さもあります。俳句は韻を考えなくていい。確かにできた俳句は、日本の俳人が見たら滑稽なものでしょうが、子供が俳句を書くことは非常に良いことです。ただ自動的に文学を読むだけでなく、自分の方から文学を書くことが大切です。俳句の場合は、それができます。子供のころから、日本の影響を無意識に受けている人がかなりいると思います。

御手洗（司会） …二番目の質問は、海外における日本語研究の状況についてお聞かせ願えますでしょうか。

キーン…一時、ヨーロッパではなかなか日本語を勉強することができませんでした。私はイタリアという国が大好きですが、イタリアで日本語を勉強する場合は、一番大きな教室でも足りないのです、映画館で日本語を教えることもありました。どうしてそんなに人気があるかという点、イタリアの法律で、美術館などの案内者はイタリアの国籍を持った人でなければなら

い。ですから、日本人が日本の団体を案内することはできません。イタリア人は日本語を覚えたら、案内者になれるという目的がありました。現在の話ではなく二十年前のことです。イタリア人が本当に日本文学を勉強したいと思ったら、アメリカに行かねばなりません。私には、イタリア人の弟子もいます。それだけでなく、他の国の人もいます。アメリカ人でも、私の学生はやがてはそれぞれの場所を見つけ、そこで意義ある研究生活を積む人がほとんどです。中にはオーストラリアの人もいました。

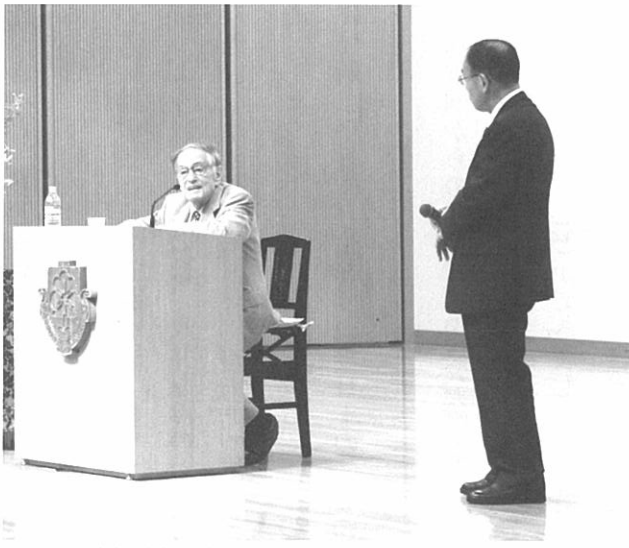
彼は、初めのうちは哲学がいいと思っていました。私の影響を受け、文学を志すようになり、源氏物語の新しい英訳も発表したり、伊勢物語も翻訳し、現在は平家物語の翻訳をしています。アメリカの方々に私の教え子がありますが、それはどこへ行っても知人がいるということです。私のもとで博士号を得た人もいるし、一般向けの講義を聴いただけの人もいて、どこへ行っても誰か知人がいます。

それは、特に日本語の場合意味があります。もし私が英文学の先生だったら、そういうことはないでしょう。日本の場合ならあるかもしれませんが、アメリカの場合はみんな英文学を一応知っているから、珍しくありません。ですから、同じ英文学の講義を聴いたということは、

余り意味がないのです。ところが日本語はまだ特別な学問で、仮名を覚え、漢字を覚え、日本の文法を覚える。そういう体験のある人は、みんな友達です。私が始めてソ連に行ったとき、当時、アメリカとソ連の関係が悪かったのですが、すぐ友達がたくさんできました。みんなソ連で日本語を教えていた人達です。

御手洗（司会）…それでは先生自身の日本における留学経験とその後についてお話し願えますでしょうか。

キーン…私は、角田先生から日本文学の良さを学びました。そして当然のことですが、日本に留学できるようになったとき、京都を選びました。京都は古い都で、古い文化が残っており、



質疑応答に答えるドナルド・キーン名誉教授

戦時中に爆撃を受けなかったもので、一番いいと思いました。私の友人が、素晴らしい下宿を見つけてくれました。国宝級の下宿です。ある時、隣の家に京都大学の助教授がおり、彼がアメリカ帰りだと聞いて、私は大いに関心しました。きっと、英語の練習をさせられるだろうと。私は日本語ばかり使いたかったので。しかしある日、下宿の奥さんの都合で一緒に晩ご飯を食べました。その時から親友になりました。その若い助教授は永井道雄さんといって、後に文部大臣になりました。私が日本の現代に興味を持つようになったのは、永井さんのお陰でした。私が初めて京都の下宿に入ったときに、その奥さんは「何新聞を取りますか」と訊きましたが、新聞など読む時間がないと返事をしました。しかし永井さんの影響を受け、選挙の時は演説会を聴きに行きましたし、新聞も丁寧に読んで新しい日本、生きている日本のことにも深い関心を持つようになりました。

そして京都から東京に行ったときに、永井さんの幼稚園からの友達で、中央公論社という出版社の社長の島中鵬二さんに会いました。島中さんは、会いたい人がいたら誰でも紹介できまうと言いました。私は会いたい日本の作家に、ほとんど全部会うことができました。当時は誰もそう思わなかったのですが、昭和二十八年、私が京都に留学した時代が、日本文学の黄金時

代でした。当時の大家である谷崎潤一郎、志賀直哉、永井荷風らが月刊誌に毎月何か書いていましたし、川端康成、三島由紀夫、阿部公房といった人が活躍していました。現在は残念ながら、同じことは言えないと思います。

御手洗（司会）…永井道雄先生は、オハイオ州立大学で勉強され、文部大臣になられ「富士山よりあちらは人生の一里塚」という本を書かれています。教育は全国の灯台にならなければならぬ、いろいろなところに八ヶ岳があるということを披露しています。次は学生から、「ドナルド・キーン先生は、夢を見るととき、日本語ですか、それとも英語で夢を見られるのですか」という質問です。

キーン…夢によります。

御手洗（司会）…次も学生からですが、「現代は異文化交流時代ですが、日本全体が内向きで、貝に閉じ籠り日本だけでやっていこうという姿勢が強く感じられます。これから大学も秋

の学期、国際化を考えると、留学生も含め、色々な世界の人との付き合いをもっと行えば、元の日本の元気な姿に戻り、経済的にも発展するのではないか」という意見です。先生は日本語教育の国際化について、どうお考えですか。

キーン…確かにその傾向は非常に強くなったようです。大学生が外国へ行きたくないなど、昔の時代ではありえないことでした。そう考える人は、根本的に間違っています。外国を知らなければ、自分の国も知らないのです。それは大きいです。例えば、日本文学というものも、外国を知らなければわからない。鹿鳴館時代、日本人の男性はロンドン、女性はパリに洋服を注文し、ダンスを覚え外国人と踊り、非常に西洋的でしたが、その次の世代は日本主義の時代でした。そういうこともあります。日本はいつも同じ方向に向かっていませんが、今、外国へ行くチャンスを断わる人は、根本的に間違っていると私は思っています。後悔するに違いありません。

御手洗（司会）…若い世代、これからの日本へのメッセージがありました。札幌大学は北海道

インターナショナルスクールとも関係を持って
おります。最後に、北海道インターナシ
ョナルスクールの八歳の生徒さんから、先生に
花束を贈呈いたします。お母さんも、大学院
時代、先生の作品で論文を書かれました。

先生は今日、朝八時に東京を發たれ、かな
りお疲れです。もう一度盛大な拍手をお願い
します。本日は有難うございました。

〔付記〕本稿は、二〇一二年七月十八日、札幌
大学文化学部が主催し、札幌大学附属総合
研究所が共催で開催した札幌大学創立四十五
周年記念講演会の記録集である。



北海道インターナショナルスクールの8歳の生徒から
花束を受け取るドナルド・キーン名誉教授



ドナルド・キーン

一九二二年、米国ニューヨークに生まれる。米国コロンビア大学、同大学院、ハーバード大学大学院で学ぶ。英国ケンブリッジ大学を経てコロンビア大学で日本文学を担当。京都大学大学院にも留学。コロンビア大学名誉教授。アメリカ・アカデミー会員。日本文学士院客員。対し勲二等旭日重光章、二〇〇八年には文化勲章受章。世界における日本文学・日本文化研究者の第一人者。

【著書】

- 『日本文学のなかへ』文藝春秋 一九七九年。
『百代の過客 日記にみる日本人』金関訳 朝日選書上下 一九八四年、のち入り全一卷 朝日新聞社 講談社学術文庫 二〇一一年 読売文学賞
『日本人の美意識』金関訳 中央公論者 一九九〇年、中公文庫 一九九九年
『明治天皇』角地幸男訳 新潮社 上下 二〇〇一年、新潮文庫 全四冊 二〇〇七年 毎日出版文化賞

など多数。

札幌大学附属総合研究所 BOOKLET 第7号
世界の中の日本文化と日本文学

ドナルド・キーン 著

2012年12月20日 発行

発行 札幌大学附属総合研究所
札幌市豊平区西岡3条7丁目3-1
(011) 852-9150 (ダイヤルイン)

印刷 柏楊印刷(株)

ISBN978-4-905223-04-7